

首切り「三本柱」を率先妥結し 10万人首切りの道をはき清める動労革マル



84. 11. 7
No. 1786

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄千葉動力車労働組合

国鉄当局は、首切り「三本柱」の受け入れを拒否した動労千葉、国労に対し、一方的な交渉打ち切り雇用安定協約破棄を通告するとともに、二五〇〇〇名の要員を合理化する「60・3ダイ改」を強行しようとしている。
動労「本部」革マルを手先に、国鉄労働運動解体に一気に突き進む自民党・監理委員会・国鉄当局の攻撃をうち破り、反撃に転じなければならぬ。「11・10国鉄労働者集会」をその突破口としようではないか。

「三本柱」は10万人首切りの突破口

監理委員会の第二次緊急提言でも明らかにならぬに、われわれは今、「一九八七年七月一分割・民営化」と、「それまでの間に10〜15万人の要員合理化を行う」というすさまじい攻撃に直面している。

これが国鉄労働運動圧殺攻撃以外のなにものでもないことは、何よりも「三本柱」の強要・団交打ち切り雇用安定協約破棄にみられる、当局の対応の中にはっきりと示されている。

つまり、当局は、10〜15万人の「余剰人員」の「整理」について、今回打ち切り通告を行った「三本柱」の「休職」「出向」により、国鉄から追いつくことで実現せんとしているのだ。

ところが、動労「本部」革マルは、当局の恫喝に屈し、またしても鉄労と共に裏切りの片仕切りを行った。その上で、動労「本部」革マルは、自らの裏切りを正当化し、動労千葉や国労攻撃を開始し、さらに「60・3ダイ改」の裏切りに突き進んでいる。彼らの犯罪性について、以下、具体的事実をもって暴露・断罪していく。

闘う前から屈服している 動労「本部」革マル

動労札幌地本情報『さつぼろ』（10・20付No.2）は次のように主張している。

国労中央は「三本柱」白紙撤回、「雇用安定協約」締結を要求しているが、これは「正しい」とはいえない。なぜならば当局は「三本柱」は組合と合意を得なくても、実施する」との固い決意・強い意志で我々にはぞんできたからだ。そのことを動労はいち早く察知したから「雇用を守る」ことを基本軸

にすえ、そのためには「三本柱」をクリアーすることを全体で決意し、精力的に交渉を展開してきた。

中曽根、当局の攻撃に「国家意志としての攻撃」などとちぢみあがり、初めから闘う気などサラサラなく、ただ妥結することに全力を尽くしてきたことを正直に吐露している。

次に、関東地評青年部情報『ひばな』（10・25 No.7）を見てみよう。

「三本柱」について「入口」で「のむか否か」と問題をたて「反対／反対」と言って阻止できればそれにこしたことはない。しかし、当局、再建監理委はストリートに生首を切っていくことをめざしているのだ。まさに国労は結果としてそうした攻撃をみちびくことに、ひと役かつたといえる。

当局の首切り攻撃を全面的に受け入れたうえで、なんと国労が当局の攻撃を引き出したと主張しているのである。

必死で当局を応援する 動労「本部」革マル

さらに許せぬことには、当局に対して「動労と妥結した以上の内容で国労や動労千葉と妥結するな」と釘をさしているのだ。（電話連絡第一六九号一九八四・十・三〇付）

10月29日の準トップ交渉の席上、「協定を結ばない労組に対して何かを譲歩して対応するとすれば労使の信義は破壊される」と申し入れ、「後から妥結する労組に対して『何かをだす』などということは全く考えていない」との当局回答を得て胸をなでおろすという、反動的で腐敗したあさましい姿をあらわにしている。（次号につづく）

全力で
11・10 国鉄労働者集会へ
とき 11月10日（土）午後 五時三〇分
ところ 千葉市・千葉県教育会館大ホール
主催 国鉄千葉動力車労働組合
全国鉄労仲者の
総反撃体制を築こう